



Made in
AKITA

～メイド・イン・秋田～

次
代
に
紡
ぐ

秋
田
の

“
技
”

- P2~3 廣瀬産業(縫製加工)
- P4~5 秋田研磨工業(研磨加工)
- P6 大館工芸社(大館曲げわっぱ)
- P7 大曲の花火協同組合・花火創造企業(花火製造)
- P8 秋田県マップ

東北電力秋田支店の地域に寄り添う取り組み

四季折々、豊かな自然が見せる様々な表情が魅力の秋田県。職人の手から生まれる歴史や伝統文化に裏打ちされた工芸品や独自の技術を生かした産業製品なども秋田の大きな魅力だ。それらの「技」は次世代にも確実に受け継がれようとしている。本特集では、秋田が持つ魅力ある「ものづくりの力」の一端を紹介したい。

由利
本荘市

縫製加工

廣瀬産業

ひろせさんぎょう

材問わず



廣瀬産業代表取締役社長

ひろせ てつ
廣瀬 徹さん

雄大な姿と度重なる火山活動から山岳信仰の対象となってきた鳥海山。その麓に位置する由利本荘市に、「どんなものでも縫える」という高い技術を武器として成長を続ける企業がある。名前は廣瀬産業。薄くて軽いテント生地から厚くて硬いキャンバス生地まで、多種多様な生地の縫製加工を得意とする。

主な製品は登山用のテントや衣料のほか、消防服や救急隊員の感染防止衣、自衛隊の装備品など。どれも着用者の生命や安全を守る高い機能性を持つ。約2400平方メートルの広い本社工場には、キャンバス生地からアパレルウェアまで様々なラインごとに整然と専用の機械が並び、効率的に生産が行われている。

「フロン秋田」という言葉にこだわり、高機能製品を提供する同社。その高い品質は、全国の消防や警察、



各製品の製造ラインごとに整然と機械が配置されることで、効率的な生産を可能にしている

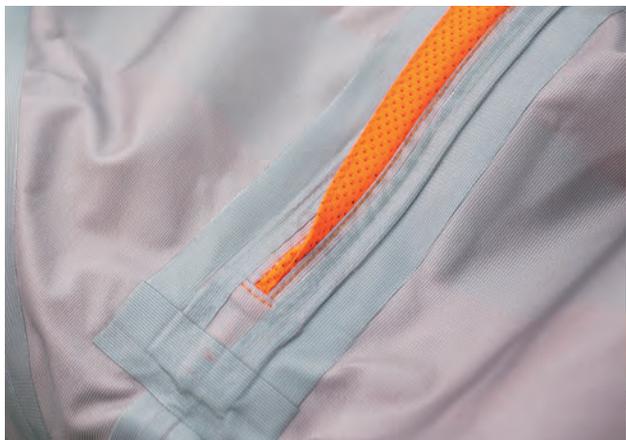
有名アウトドアウェア企業との取引が証明している。雨などの水滴は通さず蒸気のみ通す特徴を持ち、厳格な品質基準を持つ「ゴアテックス製品」の製造を認められている国内に数少ない工場の一つでもある。縫い目からの水漏れを防ぐ「シームテープ」の熱圧着技術や超音波で生地を熱溶着する「無縫製」といった高い技術を生かし、同社は数々の実績を築いている。また、同社は30歳代までの社員が全体の4割を占める。ベテランが技術を伝える指導員制度も確立されており、高い技術は確実に継承されている。



由利本荘市

3

次代に紡ぐ 秋田の“技”



左/縫い目に沿ってきっちりとシームテープが貼られている 中/アウトドアウェアのサンプル制作の様子 右/ダウンジャケットの修理。全て手縫いで行う



上/完成した製品にキズなどがいないか厳しくチェックする。写真はテントの検品作業 下/軽さと動きやすさを両立したレスキュー隊員向けの防寒作業服。同社初の自社ブランド製品だ

さらに同社は初の自社ブランド製品として、軽くて目立つ防寒作業服を開発。培ったアウトドアウェア製造の経験を生かし、防水・防寒性を高めると同時に、軽さと動きやすさを両立した。遭難者の捜索活動など厳しい環境下に適した作業服はこれまで市場に存在しなかったため、需要を的確に捉え

高い縫製技術 素

た同製品は販売を伸ばしている。このほかにも、新たな取り組みとして無縫製技術を生かしたコート製造を開始し、アパレル分野にも進出。消防服などの補修サービスにも乗り出す予定だ。

「フロム秋田」にこだわり、磨き抜いてきた縫製加工技術。これを揺るがぬ土台に、廣瀬産業は自社ブランド製品の開発やアパレル分野への進出といった新たな地平を次々に切り開いている。

シームテープの熱圧着作業。縫い目からの水漏れを防ぎ、防水を実現する

部長だった初代の廣瀬太次郎氏が独立し、綿や麻の卸問屋「廣瀬商会」を設立。1971年に同社の縫製部門が分社化し、秋田県の誘致企業として由利本荘市に進出したのが、現在の廣瀬産業だ。以降、県内に立て続けに工場を開設。地域に密着した経営を続けてきた。

秋田に根差して約半世紀。同社社長の廣瀬徹さんは、「地元可愛される企業を目指し、土地の縁を大切にできた」と力強く語る。毎年地元から新入社員を採用。現在の社員数約150人のうち、県内出身者が大半を占める。さらに親子孫の3世代で働いているケースもあるほど、同社と地域の結びつきは強い。

また、自社の技術を生かし、地域貢献活動にも積極的に取り組む。毎年秋に行われる市民祭りで「親子ミシン教室」を開催。多くの市民にバックなどを製作してもらうこの催しは好評を博している。

廣瀬産業株式会社

創 業：1971年
所 在 地：秋田県由利本荘市
石脇山ノ神11-904
ホームページ：
<http://hirosesangyo.co.jp/>



縫製や検品を終え、出荷を待つアウトドアウェア

湯沢市

研磨加工

秋田研磨工業

あきたけんまこうぎょう



秋田研磨工業代表取締役
あべ ただお 忠雄さん

3月に東京・日本橋の百貨店で開催された万年筆の展示即売会。そこにひととき注目を集めた万年筆があった。展示会の主役を出展したのは湯沢市にある秋田研磨工業だ。磨き上げた独自の技術を生かし、これまでの常識とは全く異なるペン先を開発。県内から全ての部品を調達する「メード・イン・秋田」の万年筆が全国で話題を呼んでいる。

一般的な万年筆のペン先は、加工しやすい金やスチールの先端に摩擦を防ぐ硬いイリジウムを溶接したものが使われている。しかし、同社が開発したペン先はこの常識を覆した。イリジウムより硬く加工の難しい人工のサファイアやルビーを自在に切削、研磨。長さ約3ミリ、幅約1ミリ、厚さ約0.4ミリのペン先をつくりあげた。非常に高い耐久性・耐薬品性をもち、半永久的に使用可能。裏側にインクの通る溝が彫ってあり、表側に通常あるはずの空気穴や切り込みがないため、漏れたインクで手や紙が汚れにくく、この特徴も持つ。ペン先の構造について、日本と米国で特許も取得している。

このペン先を使用し、同社が昨年販売を開始したのが高級万年筆「KEMMA」だ。代表取締役の阿部忠雄さんはKEMMAを「研磨の技術者として」培った



万年筆のペン先に人工のルビーやサファイアを使用することで耐久性やインクによる錆び・腐食を防ぐ耐薬品性を向上させた

た技術の粋を集めてつくりあげた。『絶対にする』という理念が形になったものと表現する。その書き心地は、非常に柔らかく滑らか。持ちやすく、安定した書き味も売りの。湯沢市伝統の川連塗りをデザインに取り入れるなど、芸術性も高い。



万年筆の組み立て作業を行っている様子。部品は全て県内から調達。まさに「メード・イン・秋田」だ

技術 万年筆の常識変えた



湯沢市



左/湯沢市伝統の川連塗^{かわつら}りを万年筆のデザインに取り入れるなど、芸術性も高い
右/柔らかで滑らかな書き心地を実現した



上/工場の全景。ここで万年筆のペン先や腕時計用サファイアカバーガラスなどの研磨加工が行われている 下/万年筆のペン先や腕時計用サファイアカバーガラスの切削を行っている様子



現在は県内のみ販売だが、今後は価格帯や品揃えを強化し、全国に販路を拡大していくという。

「メイド・イン・秋田」もKEMMAの特筆すべき点だ。金属部品や樹脂部分を県内企業に発注。県内の技術を結集してつくりあげたKEMMAは、地場産業の盛

り上げや地域の雇用創出にも一役買っている。

万年筆の常識を覆したKEMMAは、何を源流に生まれたのか。同社が1985年の創立以来、主に行ってきた事業は腕時計用サファイアカバーガラスなどの研磨加工だ。不良品発生率0.1%以下を誇り、今年に入ってから不良品の発生はゼロだ。研究を重ね、独自の加工機械も開発した。こうした高い技術力が40工程を超えるペン先の研磨加工に生きている。

「培った研磨技術を生かし、誰もつくっていないもの、これから売れる可能性のあるものに挑戦したかった」と阿部さんは開発のきっかけを説明する。だが、決して平坦な道のみだったわけではない。発売までに要した開発期間は7年。どのような形に加工すればよいのか、どんな素材や機械が加工に適しているのか。多くの未知からのスタートだったため、書き心地が硬すぎたり、インクが想定通りに下りてこなかったりするなど様々な課題が発生した。これを膨大な数の改善や



研磨加工前の人工サファイア

耐久テストを繰り返すことで克服。本社のギャラリーに並ぶ多くの試作品は開発の苦労を物語る。
同社は地域の学校に足を運び、万年筆の試し書きをしてもらうことで、ものづ

培った研磨

くりの魅力を伝えている。「メイド・イン・秋田」で生み出された万年筆の持つ力が、次世代の発掘や地域振興につながり始めている。

株式会社秋田研磨工業

創業：1985年

所在地：秋田県湯沢市
相川街道西15-5

ホームページ：
<http://www.yutopia.or.jp/~kenma/>



様々な形状の腕時計用サファイアカバーガラス。高い技術を生かし、どのような形の腕時計にも対応可能だ

板を熱湯で煮た後、技術と経験に基づいた
絶妙な力加減で曲げ加工を行う

秋田杉の美しさ生かし 用途広がる

大館市

大館工芸社

大館曲げわっぱ

おおだてこうげいしゃ



大館市



大館工芸社代表取締役
みづくら かずお
三ツ倉 和雄さん

秋田県の民謡、秋田音頭にも秋田名物として歌われる「大館曲げわっぱ」。良質な秋田杉を使ってつくられたその質感はなめらかで軽く、自然と手になじむ。シンプルで端正なデザインも魅力だ。よく知られた弁当箱だけでなく、最近では酒器やコーヒーカーップとしての製品も発売されるなど、現代の生活に合わせその用途は広がりを見せている。

10世紀初頭につくられた製品も発見されるほど大館曲げわっぱの歴史は古い。本格的な生産が始まったのは現在から約400年前。関ヶ原の戦いで豊臣方として参戦した佐竹氏が秋田に移封された際、藩の貧窮を救済するため下級武士の副業として奨励したのがきっかけと言われる。国の伝統的工

上／定番の弁当箱だけでなく、現代の生活様式に合わせコーヒーカーップなども製作されている 下／1ミリ以下の厚さの違いでも、曲げわっぱは製品にならなくなってしまう。かんなどで微妙な厚さを調節する

国の伝統的工

芸品にも指定されている。まっすぐに通った美しい木目と光沢を特徴に持つ大館の秋田杉を生かしたこの産業は、現在まで脈々と受け継がれてきた。
初代の堺谷哲朗氏が大館の職人とともに大館工芸社を創立したのは1959年。花器や工芸品の製造などから始まった同社は62年には、郷土玩具の「お杉わらべ」で通産大臣賞に輝く。受賞を契機に曲げわっぱの製造にも進出し、持ち前の技術力で成長を遂げた。その品質の高さを代表取締役の三ツ倉和雄さんは「卸会社から検品せずに百貨店に卸せると言われたほど」と語る。後継者の不在などで存続の危機に立たされたこともあったが、それを乗り越え、現在も大館曲げわっぱの生産の中心を担っている。

その大部分が手作業で、非常に高度な技術が必要だ。例えば曲げ加工。板を熱湯から取り出し、熱いうちに型に合わせ素早く曲げるには技術と経験に基づく絶妙な力加減が欠かせない。わずかなずれが致命傷となる曲げわっぱの製作。木の性質を見抜く職人の「目」で美しい曲げわっぱを生み出す。

秋田杉の減少や人口減に伴う担い手不足などの影響により、大館曲げわっぱの未来を巡る環境は決して楽観視できるものではない。そのような中、同社は地元の小中学生に曲げわっぱづくりを体験してもらったり、次世代に向けた活動を展開。若手が飛び込みやすい環境づくりも重要施策に挙げる。同社理念に掲げられた「大館の曲げわっぱを後世に伝え続ける」という言葉。手に持った製品一つ一つからこの言葉への決意が伝わってきた。



左／表面を滑らかに仕上げる「塗面研磨」と呼ばれるやすりがけを終え、整然と並べられた曲げわっぱ
右上／桜の皮で縫い合わせている様子 右下／原材料となる樹齢100年前後の秋田杉

株式会社大館工芸社

創業：1959年
所在地：秋田県大館市
積内家後29-15
ホームページ・オンラインショップ：
<http://www.magewappa.co.jp/>



大仙市の住民と花火の関係は深い。江戸時代から神社の祭礼に花火を奉納する習慣があり、現在でも常に花火が生活の身近にある。市内には、結婚式や入学・卒業式、子どもが生まれたときなどイベントがある度に花火を打ち上げる習慣が存在する。



左／釜を回転させながら火薬を小さな丸の形に固めていく「星かけ」と呼ばれる作業
右／火薬の原材料を混ぜ合わせる調合作業。比率によって色が違うため、全て手作業で行う

現在、同組合には地元の花火製造業者4社が加盟する。中でも、同組合が製作し「大曲の花火」のクライマックスを飾る「大会提供花火」は、同組合の技術の結晶だ。約5分間にわたり1500発が音楽とともに打ち上げられ、見る者を圧倒・魅了する。



上／組合が製作した「大会提供花火」が大曲の花火のクライマックスを飾った(大仙市提供)
下／花火玉の中の様子。火薬の粒が規則正しく敷き詰められている

夏の風物詩、花火。大仙市の大曲地区で開催される全国花火競技大会は、「大曲の花火」と呼ばれ、日本最大級の規模を誇る。毎年8月に開かれ、70万人を超える観光客が訪れる。100年以上の歴史を持ち、優秀な作品には内閣総理大臣賞が授与されるなど権威ある大会となっている。



大曲の花火協同組合代表理事
花火創造企業代表取締役社長
こまつ たかのぶ
小松 忠信さん

「忍耐」と花火づくりを表現するのは、大曲の花火協同組合の代表理事を務める小松忠信さん。打ち上げればなくなる花火は、同じものをつくり続ける我慢強さが必要だという。忍耐力が技術を育み、美しい花火をつくる。

このような花火に対する身近な感覚が、「大曲の花火」を日本有数の大会に育て上げた。

花火づくりには様々な工程がある。火薬の調合や火薬を玉状に加工していく「星かけ」、仕込みと呼ばれる火薬を同心円に配置する作業などだ。こ



花火玉にクラフト紙を貼っていく仕上げの作業。クラフト紙が打ち上げ時の衝撃から花火玉を守る

的に、「花火産業構想」を立ち上げた。その構想に基づき、地元企業の出資などによって15年に設立されたのが「花火創造企業」。16年度に工場が完成。同年に本格稼働を開始し、汎用性の高い比較的小さいサイズの花火玉の製造を行っている。花火イベ

ントの運営サポート事業も行う。

同社は社員の多くを若手が占める。大曲の花火技術を伝える場になっていると同時に、地域活性化にも貢献している。花火創造企業の社長も務める小松さんは、同社を「花火づくり企業として、まだ駆け出し」と表現。「演出もできるような人材を育てていきたい」と未来に向けて力を込める。

若い力を呼び込み、誕生した花火創造企業。伝統ある花火の新たな担い手たちが生まれようとしている。

新たな担い手 県内外から

大曲の花火協同組合 ／株式会社花火創造企業

創業：1978年／2015年
所在地：秋田県大仙市
内小友山根89-31



大仙市

花火製造

大曲の花火協同組合／花火創造企業

おおまがりのはなびきょうどうくみあい／はなびそうぞうきぎょう



大仙市

紙でできた「玉皮」という入れ物に火薬の粒を詰めていく「玉詰め」と呼ばれる作業。この時点で打ち上げたときの花火の形や色が決まる



大館工芸社のショールーム。定番の弁当箱だけでなく、現代の生活に合わせ様々な商品がそろう



大曲の花火協同組合 / 花火創造企業

仕込みの途中の花火玉。花火創造企業では主に汎用性の高い比較的小さいサイズの花火玉の製造を行う



湯沢市 秋田研磨工業

柔らかで滑らかな書き心地を実現した秋田研磨工業の万年筆



秋田県マップ

由利本荘市 廣瀬産業

廣瀬産業が製造する消防服。防災、防水、遮熱の高い機能を有している



大館営業所員が挑戦した「本場大館ぎりたんぽ検定」(右)と「忠犬ハチ公のふるさと秋田犬検定」の認定証



秋田営業所による秋田赤十字乳児院でのボランティア活動の様子

東北電力 秋田支店 地域に寄り添う 取り組み

東北電力秋田支店では、「コーポレートスローガン」より、「そう、ちから。」の実現に向け、県内の事業所において、地域活性化やボランティア活動などの地域に寄り添う取り組みを展開している。活動の一つが「地域を知る」取り組み。秋田県に住み、働く社員が地域資源や観光情報を学ぶ機会を設けている。大館営業所では、秋田を代表する郷土料理「ぎりたんぽ鍋」をどう料理すれば一番美味しく味わえるかをテーマにした調理方法の習得、秋田原産の大型犬種「秋田犬」の起源・特徴といった知識レベルを高めることに取り組んでいる。認定試験にも挑戦し、「本場大館ぎりたんぽ検定」では2017年度中に全所員が合格を果たした。「忠犬ハチ公のふるさと秋田犬検定」についても、現在、全所員が合格に向けて日々勉強を重ねている。大館営業所の担当者は「地域資源や文化などの知識情報を地域の方々とのコミュニケーションに生かすとともに、県内外へ情報発信することで地域活性化につなげていきたい」と語る。

また、清掃活動やボランティア活動にも積極的に取り組んでいる。秋田営業所では、子どもの養育支援を行っている秋田赤十字乳児院に対し、活動を展開。施設内の照明、空調などの清掃や社員から集めた育児用品(衣類・おもちゃ・絵本など)の寄贈を行っている。秋田営業所は地域のために何かボランティア活動ができないかと考え、10年に市のボランティアセンターに相談。同施設を紹介されたことをきっかけに支援を開始した。秋田営業所の担当者は、「未来を担う子どもたちの健やかな成長を支援するために、この活動を継続していきたい」と話す。